

理科において「主体的・対話的で深い学び」を成立させる諸要因に関する研究

— ナラティブ論を基軸とした理科授業分析による一考察 —

理科 大木裕未
指導教員 和田一郎

国内外の諸調査を踏まえ、日本における学校教育では改革が進められている。平成29年3月に公示された「新学習指導要領」では、「何を学ぶか」に加え、「何ができるようになるか」、「どのように学ぶか」について検討が重ねられた。特に、学習について、「主体的・対話的で深い学び」の実現が目指されると指摘された。

しかし、この学びを展開するための視点は、未だ検討課題である。そこで本研究では、教育学の理論に着目し「主体的・対話的で深い学び」の具現化の視点を導出することを目的とした。そしてその結果、以下の諸点が明らかとなった。

まず、理科学習における対話についてである。教室での対話の内実について、ブルナーの指摘するナラティブ論にて捉えられることが明らかとなった。

次に、学習論的視点についてである。思考・表現を捉えるナラティブは、子どもそれぞれに固有であることが明らかになったことから、ナラティブ論で子どもの学習に関わる主体性を捉えられることが明らかとなった。また、ナラティブの構築には対話が不可欠であったことから、ナラティブ論で対話的な学びを捉えられることが明らかとなった。そしてそれらにより、深い学びの達成を説明することが可能となった。

そして、評価論的視点についてである。子どもの思考・表現であるナラティブについて、ホワイトの「知識の構成要素」から捉えられることが明らかとなった。そのため、「主体的・対話的で深い学び」における評価は「知識の構成要素」から行えることが可能であると言える。

また、教授論的視点についてである。対話的な理科授業において、教師が子どもに、情報を表現し伝達することを促すことで、子どもは情報を活用し、ナラティブを構築することが可能となる。そして、子どもが構築したナラティブについて、教師が整理や評価・改善、発展させることを繰り返し促すことで、子どものナラティブの質が向上する。「主体的・対話的で深い学び」における促進の視点は、「理科における言語・非言語の相互連関の促進に関する視点」と捉えられることが明らかとなった。

最後に、実際に展開していくための学習モデルについてである。「主体的・対話的で深い学び」を成立させる学習モデルは、ウェルズの学習モデルの視点に、ナラティブ論を加味した「協働的な対話活動による探究を基軸とした学習モデル」から捉えられることが明らかとなった。